



年 組 名前

道新ワークシート

道内再エネ38%到達

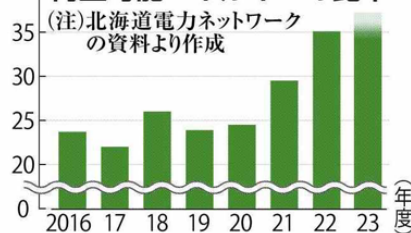
発電量比率 政府目標に

北海道エリアの直近1年と政府の2030年度目標の電源比率(%)

	再生可能エネルギー					原子力	火力	水素・アンモニア
	水力	太陽光	風力	地熱	バイオマス			
北海道エリア (2022年11月～2023年10月)	38.0					0	62.0	0
	15.4	10.1	5.8	0.3	6.4			
政府の2030年度目標	36～38					20～22	41	1
	11	14～16	5	1	5			

(注)北海道電力ネットワーク、経済産業省の資料より作成

道内の発電電力量に占める再生可能エネルギーの比率



(注)北海道電力ネットワークの資料より作成

太陽光、風力施設増え急伸

道内の発電電力量に占める再生可能エネルギーの割合が急伸し、直近1年間(2022年11月～23年10月)は38%と、政府が掲げる30年度時点の導入目標(36～38%)に到達していることが分かった。太陽光や風力の発電所が増えているためで、春季は50%を超え、再生可能エネルギーが電力使用量を上回る時間帯もあるほどだ。道内では今後も洋上風力などの開発が続く見通し。電源環境は急速に変容しており、長期停止中の北海道電力泊原発(後志管内泊村)の再稼働を巡る動きにも影響を与えそうだ。

北電ネットワークの公表

資料を北海道新聞が分析した。再生可能エネルギーは水力、太陽光、風力、地熱、バイオマスの五つを指す。直近1年間は前年より6.5ポイント上昇している。22年度の全国平均(21.7%)と比べると7割以上高い状況にある。

23年度ベースでも22年度(35.1%)を上回る水準で推移。政府が21年にまとめた「エネルギー基本計画」の目標に達しそうだ。

再生可能エネルギー比率が高いのは春季だ。雪解け水が大量に出る上、日射量も増えるためで、今年4～6月は53.7%と、発電量の過半が再生可能だった。電源別では水力(24.1%)、太陽光(15.2%)、バイオマス(7.1%)の順に多かった。

特に休日は、電力需要が減って火力発電の運転が抑えられる。大型連休最終日の5月7日は、午前10時から午後2時台の5時間、道内の電力使用量を再生可能エネルギーが上回った。余った電気は道内外をつなぐ送電線「北本連系線」で本州に送ったほか、蓄電池の動きをする揚水発電所で水をくみ上げて消費していた。

一方、暖房で電力需要が増える冬季の再生可能比率は他の季節より落ち込む。1～3月は30.4%と、春季より20ポイント以上低かった。それでも全体として再生可能の発電量が増えている背景には、11年の東京電力福島第1原発事故後に再生可能エネルギーの開発が進んだ流れがある。経済産業省によると、道内の太陽光の発電能力は23年7月に86万7千瓩となり、20年3月から28%増えた。同じ期間に風力は1.7倍、バイオマスは3倍になった。多くを北電グループ以外が手がけている。

北電は泊原発の早期再稼働を目指しているが、石狩市沖など5海域では、発電能力が30万～110万瓩に及ぶ洋上風力の建設に向けた動きが進んでいる。

現在、道内の発電所の発電能力に占める再生可能比率は約33%で、全国平均より4.5ポイント高い。次世代半導体の量産を目指すラピダス(東京)をはじめ「再生可能の宝庫」として北海道に関心を持つ企業が増える中、今度も導入が進みそうだ。

ただ、再生可能は天候に左右されやすい。既に後志管内と本州を結ぶ海底送電線などが計画されているが、電力の使用量と供給量を同時に合わせる調整力の拡充は課題だ。経産省の担当者は「電源を増やすだけでなく、発電した電気をよりよく使う必要がある」と指摘する。(宇野沢晋一郎)



年 組 名前

道新で ワークシート

① 直近1年間の道内の発電電力量に占める再生可能エネルギーの割合は、何パーセントに到達し、この前年より何ポイント上昇しましたか。

② 再エネの発電量が増えているのはなぜでしょう。

③ 再エネの課題は何でしょうか。